

多枝冠動脈バイパス手術と多枝経皮的冠動脈インターベンションの 治療効果は患者特性により変化する

これまでの無作為研究により、冠動脈バイパス（CABG）手術と経皮的冠動脈インターベンション（PCI）の治療効果は患者特性によって違ってくることが示されている。そこで、この研究では選別されていない一般患者集団において、CABGとPCIの治療効果が患者の臨床的特性によって変化するかを検討した。

アメリカ合衆国の66歳以上の老人医療保険受給者を対象に、1992年から2008年にわたり、多枝冠動脈バイパス手術または多枝経皮的冠動脈インターベンションを実施後、5年以上追跡した。

その結果、CABGのほうがPCIよりも死亡率の低下に関連していた（0.92倍）。またCABGによって、糖尿病や喫煙経験、心不全、末梢動脈疾患のある患者でより有意に死亡率が低下した（比率はそれぞれ0.88倍、0.82倍、0.84倍、0.85倍）。糖尿病や喫煙経験、心不全、末梢動脈疾患のある患者ではCABG後の生存率の上昇に効果が大きかったが、そのような危険因子のない患者ではPCI後の生存率はわずかに高くなった程度であった。

したがって、多枝CABGは多枝PCIに比べて死亡率の低下に関連しているといえる。また、その関連性は患者特性によって大幅に変化し、糖尿病や喫煙経験、心不全、末梢動脈疾患のある患者では生存率が高くなることが示唆された。

出典：Annals of Internal Medicine 2013; 158(10): 727-734